
失われた記憶

七瀬風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

失われた記憶

【Nコード】

N5373A

【作者名】

七瀬風

【あらすじ】

ねえ…、どうしたら君は、僕にもう一度笑いかけてくれる？たえ、君が僕を忘れてしまっても、僕は忘れない……。川での事故から、一週間…。君は今も意識を失ったまま、目を覚まさない。僕はある日、悪魔と取引きをした。その翌日、君は目を覚ました。僕けど、その時すでに、君の記憶の中から僕の存在は消えていた。

プロローグ

ねえ…、いつになったら、君は僕の方を振り向いてくれる？

どうしたら君は、僕にもう一度笑いかけてくれる？

どうしたら…僕は君を救える…？

命をかけてでも、君を救いたかった。

だけど…、君は…、もう二度と僕のことを歩と呼んでくれないんだね…。

永遠に…。。。。。

幼い頃のトラウマで、水辺が苦手な僕は、雨で増水した川の中、流される君を助けることが出来なかった。

恐怖にかられ、足がすくみ、手を差し延べることも、助けを呼びに行くことも出来なかった。

ただただ、君が流れていくのを、見ていることしか出来なかった。

どうして僕は、こんなにも無力なんだろう。

君は、僕がおぼれた時、助けてくれたのに、僕は君を助けることが

出来なかった。

こんな情けない僕のことを、君は許してはくれないだろう…。

もう昔のように話しかけてはくれないだろう…。

もしかすると、僕のことを忘れてしまっているかもしれない…。

それでも、僕は、君が好きだ。

切ないくて、苦しくて、たまらない。

早く、この気持ちを伝えたい。

たとえば、君が僕のことを忘れてしまっても、僕は…。

小さな病院の個室で、今もなお、君は意識を失ったまま、目を覚まさない。

たとえば、意識が戻ったとしても、後遺症が残るかもしれない。

それでも、君が生きていることにも変わりはない。

君を想う、この気持ちにも変わりはない。

だから、僕は毎日、彼女の手を握り締めて祈る。

『今日こそ、彼女が目を覚めますように…。』

第一話 悪魔との契約

ポツ…ポツ…ポツ…：…ザー……………。

個室の窓から外を覗くと、まだ午後二時過ぎだというのに、大きな灰色の雲が空いっぱいに広がり、時折稲妻が光っていた。

「今日は、何か嫌な予感がするなあ…。」

僕は、そっと呟く。

「唯…^{ゆい}。早く、目を開けてよ…。」

しばらくした後、あたりはすでに真っ暗で、僕はいつの間に眠ってしまったみたいだった。

眠い目をこすりながら、帰りの支度をしていると、突然、ビューツという音と共にカーテンがヒラヒラとまい、冷たい風が吹き込んだ。

「寒い…。」

僕は、窓に近付き窓を閉めようとした。

…と、その時背筋が凍る思いが胸をよぎった。

誰かが、窓辺に座っていた。

「なあ、アンタさ。この女助けたいか？」

窓辺に座っている誰かが、僕に話しかけた。

「助けてやろうか？」

その誰かが、にやっと笑うのを感じた。

僕は、勇気を出して、震える声でいう。

「あ、あの…。」

本当に…助けられるんですか…？」

「ああ、もちろん。そんなのたやすいことさ。
ただし、条件がある。」

「条件…？」

…なんだっていい！唯が…、彼女が助かるなら！」

「ほう…。」

窓辺に座っている誰かが、さらににやっと笑うのを感じると、暗がりから、やっと姿を現した。

とたんに、不思議と恐怖心が消えた。

恐怖をこえて、恐れることも分からなくなってしまったのだ。

「…あ、悪魔…。」

意地汚そうな目や口、そして、独特の耳みたいなもの。
まさに、その誰かは、僕が思い浮かべる悪魔そっくりそのものだったのだ。

「いかにも。」

俺様の名前はアイス。

まあ、でも、覚えることはないよ。

アンタ、一年後死ぬんだし。」

「…?!」

あまりに、突然のことにあまりよく事情がのみこめなかった。
そんな僕をよそに、悪魔はほくそ笑む。

「まあ、正確には、一年後に死ぬのは俺様と取引をした場合
だけど。」

そして、悪魔は続けて言った。

「ちなみに今のは、条件のひとつでもある。俺様と取引したら、
この女は目を覚ます。

だが、同時に記憶を無くす。

つまり、自分の名前も、アンタのこともわからなくなる。

どんなに頑張っても、記憶は戻らない。

記憶を無くす前、この女がアンタのことが好きだったとしても、
記憶を無くしたこの女は二度とアンタを好きにならない。永遠に。

たとえば、記憶が戻ったとしても、それは同じ。

まあ、一年後に記憶が戻るんだけどな。

つまり、アンタが死んだ時だ。」

悪魔は、ニヤニヤとながら、楽しそうに言った。

「…構いません。」

それで彼女が助かるなら…。」

僕は、覚悟を決め、言った。

ずっと、彼女が目を覚まさないよりはマシだ。

…それにどうせ、彼女は僕のことなど好きじゃないし…。

「ほう…。けっこう、結構。

ならば、契約成立だな。

よし、契約の証に、アンタの血をもらう。

右手を出しな。」

そう言って、僕がおそる、おそる差し出した右手にナイフのような
もので切ると、同じように自分の手を切り、傷口を合わせた。

「…よし、完了だ。

それじゃあ、一年後。

おかざき あゆむ
丘崎 歩くん。」

そう言って、にやっと笑うと、悪魔は消えた。

それにしてもなぜ、名前を知ってたんだろう…。

だが、僕が、その答えを知る日は二度とやってこないだろう…。

第二話 記憶のない君

翌日僕は、彼女の様子をみに病院へ向かった。

僕には、悪魔との契約が、まだ信じられなかった。

きっと、悪い夢でも見たのだろう…。

僕は、そう自分に言い聞かせながら、病院の長い廊下を走り抜けた。

個室のドアを開けるといつもなら、寝ているはずの彼女の姿がなかった。

彼女は、窓の前に立って、遠い空を悲しそうに眺めていた。

僕は、確かめるように声をかけた。

「唯…？」

だが彼女は、僕に背を向けたまま反応がない。

聞こえなかったのだろうか…。

しばらくの沈黙のあと、彼女が僕の方を振り向き、話しかけた。

「私の名前…、唯っていうの？」

あなたは、誰？

どうして、私はここにいるの？

ここはどこなの？」

夢じゃなかった。

悪魔との取引きは…夢じゃなかったんだ…。

唯は、ホントに記憶を失ってしまったんだ…。

唯の記憶の中にはもう…、僕の存在など消えてしまったんだ…。

僕は、こぼれそうになる涙を堪えながら、無理やり笑顔をつくって言った。

「…そうだよ。

君の名前は、唯…。

大平唯だよ。

それで…、僕は、丘崎歩。

…君の友達だよ。」

「ふうん…。

…あたし、唯っていうんだ…？

なんで、何も覚えてないんだろう…。変だよね。

…歩くんは、あたしのことよく知ってるの？」

「……。」

記憶が無くなって、僕のことを忘れてしまっても、生きていてほしいと願ったのは、僕。

だから、別に後悔などないはず。

…なのに、なぜこんなにも心苦しいんだろう。

なぜ、彼女の記憶を戻してほしいと願ってしまうのだろう…。

やはり、僕は間違っていたのだろうか…。

…いや、間違っただけなんかいらない。

あの時僕は、僕にしかできないことをしたんだ。
後悔なんてしない。
これで良かったんだ…。

第三話 暗闇の中の声

数日後、仕事の都合で海外にいた、彼女の両親が見舞いに来た。彼女が生まれた時から海外に行き、放置していたにもかかわらず、医師のいる手前、娘想いの両親を演じていた。だが、案の上、彼女は、自分の親のこともわからない。

「ねえ、歩くん。

この人たちは誰？

歩くんの友達？」

きょんとした顔で、自分の両親を見る。

そんな娘の様子に、彼女の母は取り乱した様子もなく、落ち着いた声でいう。

「…何か、いるものがあつたら、電話しなさいね。
できるかぎりのことはするわ。」

そう言い残し、彼女の父と共に病室を出ていった。

彼女の担当医は、見送りに行くといい、彼女の両親の後を追った。

彼女は、変な人たち…。と、小さく呟いた。

自覚は無いのだろうか、その顔は、どこか寂しそうだった。

僕は、握り拳に少し力を入れると、風を浴びて来るといい、病室を後にした。

屋上で大きく伸びをしながら、僕は横になった。

惟は、たとえ記憶が無くても、さっきの二人が自分の両親だと、分かるのだろうか…。

僕のことは、わからないにしても…。

そんなことを考えながらも、僕は深い眠りについた。

まるで、深い闇の中で誰かが、僕を呼んでいるかのように…。

『歩…、お遊びの時間は終わりだ。…あと三日。』

しばらくしてから、目を覚ますと、辺りは赤くそまり、星が微かに瞬き始めていた。

長い溜め息をついた後、僕は足早に屋上をあとにし、惟の病室に向かった。

だが、そこに彼女の姿はなかった。

僕は、トイレにでも行ったのかなと思い、病室をでて、家に向かった。

この時はまだ、まさかあんなことになるなんて、思いもよらなかった。

第四話 悪夢

ゴーン・・・ゴーン・・・

深夜二時、聞き慣れた時計が部屋に響いた。

僕は何度も寝返りをうっていた。
なんだか、胸騒ぎがする…。

異様な空気を感じる中…、突然、閉まっているはずの窓があき、カーテンが風邪に揺られてたなびいた。

そう、まるであの時と同じように…。

「よお、歩。」

聞き覚えのある声が窓の方から聞こえてきた。

悪魔…アイスだ。

「慣れなれしく、名前を呼ぶな。」

僕は冷たく言い放った。

だが、アイスは氣にとめる様子もなく、たなびくカーテンを爪で引き裂くと、ニヤリと笑った。

「そんなこと、いいのかな？
折角、面白い話をしてやろうと思ったのに。」

「…もう帰ってくれ。…もう二度と僕の前に現れないでくれ。」

「…ほう。そうか。ならば、よい。」

ただ、一つだけ言っておく。アンタのことだからどうせ聞いてなかったと思うし。

約束の期間は、一年だったが、三日間に変更だ。

俺様は、気が短いもんでね。」

そういうと、より一層ほくそ笑んだ。

三日…？じゃあ…、あと三日で僕は死ぬのか…？

「あ、そうそう。」

最後に一つ言っとくけど、アンタさ、たまにはニュース見た方がいいんじゃない？

まあ、俺様には関係ないけど。」

そう言って、悪魔は消え去った。

今度こそ、僕が悪魔に会うのは、これが最後なんだろう…。

それから数時間が経った。

結局僕は、一睡もすることが出来なかった。

悪魔が言っていたことが、ずっと頭の中で渦を巻いていたのだ。

僕は、まるで操り人形のように、誰かに操られるようにテレビをつけた。

だが、次の瞬間、僕の目に飛び込んで来たのは、あまりにひどすぎ

る、飛行機の墜落事故の様子だった。

生存者は、…ゼロ。

昨日の夕方に、起きた事故だったようだ。

そう、ちょうど、僕が病院の屋上でのんきに寝ていたときだ…。

つまり…、惟の両親が海外に戻ったときだ…。

まさかとは、思いつつも、僕は胸騒ぎがより一層ひどくなっていた。

だが、次の瞬間、飛行機に乗っていた乗客の名前が流れた。

僕は、いてもたってもいられず、家を飛び出して、惟の入院している病院に向かって走り出した。

惟に、このことを知らせてはいけない。

惟は、このことを知っては…。

赤信号だろうが、車が来ていようが、構わない。

僕は、無我夢中で走り続けた。

第五話 見えない真実

僕は、病院につくと、息をきらしながら、受付の前を走り抜け、病室の前までくると、二、三回深呼吸をして、ドアをノックした。だが、返事は無く、不気味な静けさだけが辺りを包んでいた。

僕は、もう一度、深くため息を付いてから、ドアをガラリと開け、中に踏み込んだ。

ベッドの上で、スーツと寝息をたてて、彼女が寝ていた。

なんら変わった様子も無い。

僕は、思わず力が抜けた。

だが、胸騒ぎだけは、おさまらなかった。

気分を落ち着かせようと、病室をでて、自販機のある売店に向かった。

だが、自販機の前には、すでに先客がいた。

その先客は、僕に気がつくと、話しかけてきた。

「…君は、確か、大平惟さんの友達だよね？」

重々しい口調で話しかけてきたのは、彼女の主治医だった。

「…実は、昨日、突然、大平さんの記憶が少し戻ったんだ。」

僕は、それを聞いた瞬間、嬉しかった。

だが、同時に怖かった。

彼女は、僕のことを覚えているだろうか。

…確かめるのが怖い…。

だが、それだけでは無かった。

「それと…。

昨日、大平さん…果物ナイフで自分の左手を切ったんだ。
もう少し、発見が遅れていたら…。」

そう言うのと、首を横に振った。

突然のことに、僕は身動き一つ取れなかった。

なぜ、彼女がリストカットをする必要があるのか…。

だが、僕は次の瞬間、ハッとした。まさか…。

「…動機は、恐らく…。」

主治医は、僕の様子を伺っていた。

「…飛行機の墜落事故…。…彼女の両親の死ですか？」

主治医は、小さくうなずくと、それ以上何も言わなかった。

僕は、足が鉛のように重くなっていた。

もう、これ以上話せる気分では、無かった。
だが、神はさらに残酷な運命を、僕に追わせようとしていた。

「…一応、一命は取り留めたんだが…。」

主治医は、僕に、追い討ちをかけるように続けた。

「…彼女の左腕はもう二度と…。
…動かないだろう。」

第六話 約束の日没

あれから少なくとも10分は経過しただろうか。

僕の頭の中では、さっきの会話が鮮明に再現されていた。

頭で、理解しようと思えば、思うほど拒絶する。

僕は行くあてもなくフラフラと、廊下を歩いていた。

だが、やはり最後に行き着くのは、彼女の病室の前だった。

僕は、できるだけゆっくりドアを開けた。

唯は、相変わらずベッドの上で眠っていた。

ほんの少し、青白くなった彼女の寝顔は、懐かしく感じた。

時間が経つにつれ、僕の心は鼓動を早めていた。

―彼女の記憶が戻りつつあるならば、僕の彼女と一緒にいられる時間も今この瞬間にも、少しずつ削られているのだろう。

―僕はいつまで、彼女の寝顔を見ていることができるのだろうか。

―彼女の左腕は本当に、もう二度と動かすことが出来ないのだろうか。

多くの謎を残しながらも、長い長い夜が明けた。

きっと、彼女が目を覚ます頃には、僕の存在は、この世から永遠に消え去ってしまっているだろう…。

ぼんやりとそんなことを考えていたら、唯が目をさました。

―約束の時間は日没。…もう少し時間がある。

「…唯。」

「あたし…変な夢を見ちゃった。
お父さんとお母さんが飛行機の事故で死んじゃったの。」

彼女は苦笑を浮かべ、頬に残る涙のあとを、洗い流すかのように大粒がつたう。

「あたし…記憶を取り戻さなきゃよかった…。

ううん、それより、ずっとあのまま目を覚まさなきゃよかった…。
リストカットをすれば死ねると思ったのに…生きてるし…。
なんで生きてるんだろう…。つらいよ…。」

僕はかける言葉が見つからなかった。

すべては僕のせい。

僕は、恐怖に打ち勝てなかった。

悪魔と取引をして結局彼女を苦しめてしまった。

—ごめん…、ごめん…唯。

「…歩くんは、ずっとあたしのそばにいてくれるよね？あたしを一人にしないよね？」

—それは、多分『友達』として…。

「…うん。もちろんだよ。」

できることならそうしたい。友達としてでもいい。
ずっと…そばにいられるなら…。

「…よかった。ありがとう。」

そういつて彼女は涙を流したまま微笑む。

…そろそろ日没だ。

「僕、約束があるから…ごめんね。

…ありがとう。

好きだよ、唯。」

僕はそう言うと、後ろを振り返らずに病室のドアを閉め、走り出した。

さようなら、唯。

今まで本当にありがとう。

死ぬほど好きだったよ…。

第七話 ベストフレンド

病院は大通りに面していて、夕方のせいか交通量は増していた。

僕の足は病院を出ると、意思に反して道路に向かって行く。

―ああ、僕の人生はこういう終わり方をするのか…。

別に怖いという感情はなかった。

最後に、彼女の笑顔がみれてよかった。

道路に足を踏み出した途端、後ろで彼女の声がした気がした。

「歩…！行かないで！あたしを…、一人にしないで…！」

やだなあ…幻聴かな…。

僕は苦笑を浮かべ、足を進める。

大型のトラックがスピードを緩めることなく目の前にせまってきていた。

「歩ー！！」

…ドンッ

1…2…3…数秒がたったのだろうか。

来るべき痛みはまったく来なかった。

恐る恐る目を開くと、目の前には、横でうずくまる唯と悪魔…アイスだった。

目の前にはやはりトラックがあった。

だが、ギリギリのところまで止まっていた、時間が止まっているかの
ように、何もかも静止していた。

「なんで…?」

わけが分からない僕はつぶやく。

「俺が説明する。

俺は、今時間を止めた。

本当なら規則違反なんだがな。」

そういつて、アイスはニツと笑った。

「俺は、昔人間だった時、親友に恋人を奪われた。

だから、愛や友情なんてガラスのように壊れやすいものだと思って
いた。

アンタが川で逃げた時だって、やっぱり人間なんてそんなもんだと
思っていた。

だけど、病室で毎日、毎日祈るアンタをみて、もう一度人間を信じ
てみたくなった。

そして今日まで見ていた。」

そこでいったん口を閉じると、アイスはニヤリと笑った。

「短い間だったけど、楽しかったぜ。

俺は、良いものみれて嬉しかった。

今度こそ、もう二度と会うことはないさ。

幸せにな…。」

そういつて、アイスは消えた。

僕の命を取らずに…。

ありがとう…アイス。君は悪魔でもなんでもない。僕の大切な友達…。

エピソード

「唯…大丈夫か？」

アイスが消えると同時に、止まっていた時間が動き出した。
僕は、隣りでうずくまっている唯を揺すった。

「う…ん、なんとか…。」

…って、歩…!!

どこもなんともない？

生きてる?!」

とたんに唯はガバツと起き上がると、僕の顔をみて問う。

「…生きてるよ。」

いいから、まず落ち着け。」

「ごめん、なんか…パニックっちゃって…。」

歩があのままどこかに行っちゃう気がして…。点滴引きちぎってき
ちゃった。あはははは…。」

「あははじゃないだろ…。」

普通点滴引きちぎってくるやつがどこにいます。」

…でも、唯がいなかったら、アイスも現れなかったかもしれない。
そしたら、僕は今こうやって唯と話す事は出来なかっただろう。

「…って、唯…記憶…僕のこと分かる…の?」

「うん、さっきね…。」

好きだったって言われた時に、全部思い出したの。

…ありがとう。

あたしも…歩のこと大好きだからね！」

彼女は微笑みながら、さらりと言った。

「う…ん。」

…って、お前左腕平気なの？」

僕は照れくさくて、話をそらした。

「うん。痛くはないけど、もう動かないって。しょうがないよ。自業自得だもん。」

にっこりと笑うと、彼女は僕の手をとり言う。

「ずっと…そばにいてね…。」

僕は何度もうなずき、彼女をひきよせた。

アイス…ありがとう…。

君に会えてよかった…。

僕は、たくさんのものを君からもらった。

本当にありがとう…。

失われた記憶は、取り戻された。もう欠けることは二度とないだろう。永遠に…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5373a/>

失われた記憶

2011年1月16日06時52分発行